

井村恭一

ベイスボイルズブック



ベースボ

江苏工业学院图书馆
藏书章

井村恭一

ブック



ベイスボイル・ブック

著者／井村恭一（いむら きょういち）

発行／1997年12月20日

発行者／佐藤隆信

発行所／株式会社新潮社

郵便番号162-8711／東京都新宿区矢来町71／振替00140-5-808

電話：編集部03(3266)5411・読者係03(3266)5111

印刷所／二光印刷株式会社

製本所／加藤製本株式会社

¥1,200-

© Kyoichi Imura 1997, Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-420301-7 C0093

ベースボール・ブック

装画
装幀
田 辺
新潮社装幀室
茂

それこそまさに今の今、南の大洋の島々、あらゆる場所ですうしているように人々はそれぞれの家に住み、政府のない首相、莫大な借金しかない王の息子、だれかの頭を殴るための手頃な武器もない警察、それらすべてを海上で取り囲み「実験からすべてを保護する」と称する海上委員会、それぞれがなんの対立もなく、やわらかな頼りない藪草やぶぐさのように丸く並び、そこいらの街角で噂的、その程度の関心の対象になっていて、そんなもの、つまりここではあらゆる世界を意味するものなどとは関わりもなく、島にはそもそも広大な野球場があり、二つのプロの野球チームがペナントを争い、片方のチームはこの六年間というものの一度も勝ち星をあげることができないでいる。それはほんの少し以前のあることを原因にしたもので、問題のその話はまさにこの言葉この文字、ここからはじまる、あるいはもうはじまっている。

名をクヤ・バンゲ、五人の首長が持ち回りで受け持つ王の座を占めて十三年目の彼は自宅とその庭にある小さな動物園と動物を売り払い、政府から借金をし、海上委員会を偽って投資させると高校のグラウンドしか作ったことのない男に巨大な野球場を設計させ、そのスコアボードのてっぺんに自分の木像を据え、ある長い雨の日に肺炎でこの世を去った。同じ名の息子は王の称号をチリの葡萄農家にごく安い値段で売りつけ、莫大な借金を抱えたまま野球場のそばに小さな小

屋を建てると、その扉の上にバルの看板を出し酒を売って生活した。小屋の裏で飼われていた、父親の形見でもある水牛たちは束縛の紐を食いちぎって山へと逃げ込んで繁殖し、その荒れた性質のおかげでうまく野生化した。政府が借金を抱えて赤くなり青くなりやがて土気色になって仰向けに倒れかかったとき、小さな将校団が大量に輸入された赤い手帳を片手にかかげて静かな革命を起こした。海上委員会は夜の港に上陸させた武器を持つ軍隊によって、彼らを日の昇らぬうちに貨物船の船倉につめこんで連れ去った。小さな将校団が彼方の汚れた海に放り込まれたあと、どこからかやってきた貨物船によってあらゆるサイズのグローブとバット、ユニフォームにソックス、帽子に安全スパイク、倉庫を埋めるほどのボール、防球ネット、ホームベース、大量の石灰粉が港に運び上げられた。武器にも将校にも欠けた軍隊は解散させられた上で二つの出身地によって分けられ、それぞれが野球チームとなり一つのプロ・リーグを構成し、「野球が投石の祭に置き換えられる」という海上委員会の決定はこうやって迅速に処理された。

九年後のある日、球場に近い道路の上で、一台のバスが一頭の不機嫌な水牛に停められた。バスにはウナス・ヒバ・メラグルスという野球チームの選手たちが乗っていた。水牛は頭を下げ、バスを睨みつけていた。運転手はクラクションをけたたましく鳴らし、エンジンを吹かし怒声を張り上げ、拳をふるった。水牛は道路のうえに涎を垂らし、バスのほうへとにじり寄った。この小さな世界のだれも気付かなかったが、これが始まりだった。

1 初めから終わりまで

検疫船が傾くたびにふらつきながら、マルはサイドデッキを歩いていた。

それは日課となつてゐる散歩姿で、わたしは食堂の窓からその様子を見ていた。かなり古くなつてゐるジーンズは細く、その両足は頼りなげにゆっくりと甲板を踏んでいた。吹きつける海風を受けて、マルのTシャツはちぎれた帆のようにはためいていた。

赤道に近づいて巨大になつた太陽は、なにもない海上で船をまるごと灼^やこうとしていた。

「おれの仕事はピッチャーだ」と言うマルの言葉をそのまま信じたわけではなかった。ただ、その言葉を疑う理由もなかった。わたしたちは船室が同じになつただけで、親友になつたわけではない。彼は自分の持ち物を自慢したりすることはなかったが、隠すということもなかった。泥のついたスパイクシューズは船室の床に転がっていた。その動作には緩慢さと落ち着きがあつて、椅子にはゆっくりと腰を下ろした。足は辞典のようによ厚く、大きかった。食事のときには煮た豆を犬のように食べた。いつもソーダ水を飲んでいて、灰皿のような匂いをさせていた。肌はコ

ーヒーのように灼けていて、眼は炭のように光を吸収した。わたしが「やあ」と言うと、ただ黙って笑う。手は焼けた煉瓦れんがのように熱い。あまりシャワーを浴びないが、浴びたあとにも汚れの落ちない灰皿のような匂いを漂わせている。その匂いは彼の外見とそぐわない古い匂いだった。

二週間の検疫は短いとは言えない。豚と豆とトマトの煮物ばかりの食事に慣れるのに、充分に長いとも言えない。船は改造した古い貨物船で、出航したときには空船だった。途中で二日間寄港し、貨物を積んだ。喫水線が下がり、船は出港した。快晴ではないが、穏やかな海だった。その扁平な空は日毎に熱気を帯びていった。海はでこばこしたベルトコンベアのように船を運んだ。マルはよく食べ、よく吐いた。なにもためらうことなく豆を食べ、船に酔うとすぐにデッキから海へ吐いた。音のしないポンプのようだった。吐いた豆に向かって魚が集まり、そこへサメが集まった。航海士は古いシングルアクシヨンの拳銃でサメを撃った。人をはつとさせる軽快な乾いた射撃音は、すぐに風に吹かれて響くことがない。サメは赤い血をだらしなく流した。潜水服のようにぴっちりした白い腹をみせて、そのまま他のサメに喰われていた。

船長は赤ら顔をした無口な男だった。彼はマルが吐くところをあざらしのように悲しげな顔をして見ていた。そのことについてなにか言うわけでもなく、巡礼者が聖地を巡るように黙々と島を渡っていた。「この年になると、もう船を下りるのが恐ろしいものなんだ」彼は豆を食べながら言った。「この船はおれの家みたいなものだし、おれはこの家からほとんど出たことがない」マルは手を休めることなく豆と豚肉を食べていた。わたしは木片そっくりの固いベーコンをかじりながら、耳を澄ましていた。船長はそれきり黙ったままだった。マルは食べ終えると、コーヒ

ーを三人分運んできた。彼はそれを一人で飲んだ。

「この船には犬は積んでいませんね？」わたしは船長に訊いた。船長は答えずに、じっとわたしを見た。その顔には答があり、さらには質問もあった。

話を变えてみる。「わたしは今まで自分の家を持ったことがないのですが」船長はうなずいた。マルも子供のように大きくうなずいた。

「犬が嫌いかね？」船長は少し身を屈めてささやくように言った。

「いや」わたしは首を振った。まるで忌まわしい事実を話すかのように、ゆっくりと首を振った。大げさに、わざとらしく。船長はそれ以上にも訊かなかった。わたしとしては訊くべきことは訊いてしまっていて、答も手にしていた。マルは厨房のペーコンを焼く音に氣をとられていた。眼は手元のステンレスのコーヒークップを見つめていたが、なにも聞いていないのは明らかだった。われわれのテーブルには船酔いの前兆みたいな沈黙が降りた。

わたしは犬を嫌っているわけではない。恐れる気持ちはあった。それは自分の飼ったイドリアン、彼女が狂つてからのことだった。毎夜、彼女はわたしを呼んでどこか光のない場所ですりの歌でも歌うように吠えた。それがなにを意味するのか、家族のだれにも見当がつかなかった。狂った犬に愛情がないと考えるのはそれほどおかしいことではなかった。見当がいないことではない。わたしはイドリアンに愛情も恐れも感じていた。それを口に出して話したことはない。そもそも話すべき相手が見つからなかった。

イドリアンは得体の知れない雑種の犬で、わたしは十七のときに彼女を拾ってきて育てた。フ

オックス・テリアのような四角い鼻づらをしていたが、その全身は泥水に浸かったセーターのように重くごわごわしていた。わたしを主人とし、わたしの言うことだけを聞いた。狩りは自分で覚えた。地ネズミのようにしぶとく、素早かった。その体はいつも痩せていた。それは今でも変わらないはずだった。

話は船長から始まった。彼はひげを撫でたり、脂の浮いたスープをながめたりしていた。指は焼けたソーセージのように赤黒かった。することがなくなると、手のひらを使ってテーブルのうえのごみを床に掃き落としはじめた。皿を持ち上げ、豆をより分けるように丁寧（ていねい）に埃（ほこり）やパン屑（くず）を集めた。わたしやマルの皿も持ち上げ、ごみを掻き集めた。マルは熱心にその様子を見ていた。わたしは黙っていた。厨房のコックはたばこを吸いながら、長い肉切り包丁を研いでいた。掃除が終わると船長はのろろと話し始めた。彼が無口なのはその話し方の遅さのせいだった。早く話すことができるのは短い話だけだった。短い会話には筋書きがなく、そこに謎はなかった。

「この男は船に乗ってきたとき、おれに向かってヴィ、パトラ・ダ・スイブ？ と訊いたんだ。この船の親父か、とね。それからおれの名前はマルだつてな。おれはこの船の親父だ。あらゆる意味でな。ブリッジは一つ、レーダーも一つ、クレーンも一つ。マルケサス経由。昔は羊や豚を運んでネグロ川を上ったこともある。もともとは濃いグリーン（緑）の船体。今はあんならのような客を運んでいる。昔は豚や羊。検疫が必要だつてことでは変わりはない。あんなたちは検疫のあいだ、あちこち引っぱり回されるわけだ。検疫船はこの船だけ。海上委員会のお気に入りの船だよ。なんで海上委員会って言うか、知らないだろ？ 教えてやろう。それが海上にあるからなんだと

さ。連中はなんでも海の上で決めているんだ。あんたたちは上陸したら、連絡事務所に出勤しなけりやならない。あれはただの連絡事務所だ。パネルで組んだだけ、六つぐらいの部屋しかない話では。なにかも、海の上で決まっているんだ。風呂の洗剤から、野球と映画のスケジュールまで。電話だって、連絡事務所のほうからかけることはできないって話だ。聞いた話だがね。おれだって、上陸したことはないんだから」

頭上に落ちてきたボールをグローブから落としたとき、ペドロ・サ・ラノウィタは雨雲のことを考えていた。

彼の頭上では、小さな雨雲がピンチに円陣でも組むように尻をそろえて集まりはじめていた。スコールが来るのは、もう時間の問題だった。頭上を除けば、スコールの日和^{ひより}ではない。もつとも、ラノウィタの祖父がよく言うように「雨は降るべきところへ降る」のだ。「雨が降るときに理由は問題ではない。芋がまずいときに理由は問題ではない」と祖父は言う。雨が降る時期については「雨雲には雨雲の時間というものがあり、それは地上の時間とは違うものだ。なぜなら雨降りというの人は人が小便をするのと同じようなことなのだから」と祖父は言う。

ラノウィタが守るライトには、雨を避けるための場所がなかった。センターとレフトには弱い雨なら避けられるぐらいのやせた木があった。ライトの周りには乾燥した砂地があるだけだった。砂地は一番深いところのフェンスまで続いていた。フェンスの近くには藪^{くさぶ}が茂っていた。ライトを守るのは、はじめてだった。この日の試合でも、彼の守備位置はセンターになる予定だった。

今までずっとセンターを守ってきたし、センターを守るのが好きだった。四回を過ぎるあたりからいつも木陰で守ることができるからだ。ライトだとわかつていれば、傘を持ってきただろう。傘があれば、エラーをすることもなければ雨に濡れることもなかったはずだった。

ボールが落ちると同時に、雨粒が激しく地表を叩きはじめた。ボールを拾ったとたん、もうどこに内野手がいるのか見えなくなっていた。滝の裏側から外を眺めているような状態だった。野球帽のひさしは滝に突きだした岩のような役目を果たしていた。センターを探したが、予想した方向にはだれもいなかった。辺りは薄暗くなり、砂利を撒くような雨音が彼を取り囲んでいた。灰色の空気が息詰まるほど湿っぽくなった。明るく青いアンダーシャツの袖が黒く、重くなっていた。

ラノウィタはスコールにつかまることには慣れていたが、ホームの方向がわからなくなったことには不安を感じた。ホームを見失った外野手は網をなくした漁師のようなものだと監督は言っていた。たぶん、そのとおりなのだろう。ボールはまだ手元にあった。ボールがライトに飛んだことを、ほかの野手たちは知っているはずだった。

どこからも声は聞こえてこなかった。彼を呼ぶ声はなかった。雨音は激しくなり、フライパンで生きたえびを炒めているような音をたてていた。それも世界中で一度にすべてのフライパンを使って。フライパンの音はえんえんと続いた。えびの殻が焦げる匂いすらした。ラノウィタは野球場以外のすべてのものから取り残されたような気がしていた。雨のなかの景色は暗く、なにもかもが灰色に染まっていた。長い夜が終わると、長い昼がやってきた。色もなにも見えないほど

高い空を、巨大な蠅の飛ぶような音をたてて飛行機がなんども通りすぎた。雨雲が厚いと、空港はすぐに閉鎖された。閉鎖されていないときも、減多に飛行機が降りることはなかった。彼はライトに立ったまま、雨に煙る長い不透明な暇をもてあましていた。手紙が出せないのは残念だった。祖母にチームの成績について報告するつもりだった。方向感覚についても訊きたいことがあった。骨の丈夫な傘とグローブに塗る脂を届けてほしかった。温かい芋のパンケーキも食べたかった。彼は伸びてきた外野の芝をむしって食べていた。流れてきた苦いバナナを食べたこともあった。雨は降り続いた。

降ってくるのは、雨粒だけではなかった。マヒ・フヒアという紫色の小魚が降ってきたこともあった。それは「海のろうそく」というマヒ、魚で、その名の通りに食用には向いていない。市場では籠に積んで、芋よりもずっと安い値段で売られていた。普通は肥料か燃料として使われた。ラノウイタは何匹か捕まえて、腰にぶら下げておいた。夜になるとそれを薪代わりに使った。

ラノウイタの足元では水が溜まっては引き、溜まっては引いた。雨は翌年の二月まで降り続いた。ライトの辺りは沼地のようになっていた。雨が上がったとき、シーズンは五カ月前に終わっていた。ラノウイタの髪には鮮やかな赤と緑の苔が生え、爪には白いかびがこびりついていていた。グローブはかびのせいで、古くなったドーナツみたいにすかすかしていた。彼はボールとグローブを持って、家路についた。途中で中華料理を食べ、ひとりでビールを飲んだ。

ラノウイタがスコールのなかに立っていたあいだ、試合はライトを抜きに行われた。シーズンの後半は、臨時のルールが採用された。ライトへの飛球はファールとされた。ライトへ抜け

たゴロは二塁打となった。球場はもとかなり広く作つてあつたので、ライトのことなどどれも遠い国のことのようにしか思つていなかった。島の野球チームは二つしかなかったから、ライトのポジションが消えたことで不平を唱えたのはもう一人のライトを守る選手だけだった。彼はスタンドでアイスクャンデーを売つて、残りのシーズンを過ごした。

「あれはひどい年だった。あれからしばらく、自分はゴム長靴に生えたきのこだという気がしていた」とラノウイタは言う。

男は自分が「委員会の代理」であると名乗り、それらしい身分証を見せた。身分証には男の顔写真が貼り付けてあり、青いインクでいろいろなスタンプが押されていた。疑う理由はなかったが、信じるに足りる証拠にも見えなかった。「委員会」というのは「海上委員会」のことであり、「海上委員会」がその島と政府と住民を管理しているということだった。

男はきれいにそろえた口ひげを生やしていて、褐色の髪は時代遅れな感じになでつけていた。まるで舞台劇の詐欺師みたいだった。化粧をしていないのが不思議なくらいだった。窒息しそうなくらい香水をつけていた。

「その島はなんという名前？」わたしは訊いた。

「わたしには正確に発音できない。つまり、きみにも正確には発音できない」

「あんたはその島には詳しいらしい」

「きみよりはね。たいしたことはないが。島はワルチャという名で通っている。だが、島へ行つ

でもその名はあまり通用しないだろう」

そこでドアが開き、二人連れの客が入ってきた。男は話を中断し、入口のほうへすこし背を向けた。パーテンはわたしの前にグラスを置き、小さな植木鉢に水をやるのように注意深くウイスキーを注いだ。

「島では通用しないが、気にすることはない。きみは地質調査をしに行くわけではないし、面倒なことを頼むつもりもない。報酬については、委員会のほうで保証する」

「なにを保証するんだい」

「それなりの額さ」男は居心地悪そうに、丸椅子のうえの尻の位置をずらした。

「あんたにも保証してもらいたい」

男は少しためらったが、「いいだろう」と言った。それからビールのグラスに口をつけ、慎重にビールを飲んだ。

わたしはたばこを吸いながら、男の顔を眺めた。眼元は穏やかだが、油断なく他人の手元や服装に注意していた。細い顎には古い傷があり、鼻は自動拳銃の握りみたいに角張っていた。肌は古い旅行鞆のように滑らかで、苦勞のあとはない。やくざな顔つきだとも言えるし、それ以上のものでもない。似顔絵描きが喜ぶようなわかりやすい顔だった。

「人の顔をじろじろ見るな」男は口元についたビールの泡をぬぐい、グラスをそっとカウンターに置いた。「おれにはこの顔しかないんだぜ。こんな仕事を長年やっていると、こういう顔になってくるものなんだ」

「あんたみたいな男を前に知っていたんだ」

「そういう話には興味がない」

「そっちの話を聞こう」わたしはたばこをもみ消し、並んだボトルの向こう側に見える鏡を見つめた。後ろのボックスシートには、喪服のようなドレスの女が一人で座っていた。艶のある赤毛が、豊かな溪流のように渦巻いて肩から流れていた。眼元には電話をじっと見つめつづけていたようなくまがあった。それは安っぽいテレビドラマの葬式より深刻そうに見えた。

「島へ渡ってもらいたい」男はじつと前を見つめたまま話した。「滞在は一年。費用は委員会のほうから毎月支払われる。支払い方法は、現地で指示がある」

わたしは男を遮った。「支払いは毎月第一週の火曜日までに現金で支払ってもらう。ほかに現地での経費も請求する。これは譲歩するつもりはない」

「わかった。伝えておこう。具体的なことは、船の上で連絡がつくはずだ」

「船で渡るのか」

「そうだ。飛行機はあるが、よく整備された大きな飛行場はない。船には援助物資が積まれていて、きみはその一部ということになる。権限はない。新聞記者として適当に記事を書くといい。それを報告として送ってもらう」

「援助物資？」

「島には小規模な工場が三つ四つあるだけだ。衣類や食料、そのほかの物資はすべて海上委員会が運び込んでいる。大型の輸送船が近くの島で荷揚げし、そこから小型貨物船に荷を積み替えて